

時空の漂泊

(二〇一〇年十二月十四日 第三十九号)

原 恭三

現代版 幸福考

「低迷期こそ大きく考える」

「How do you feel today ?」

「調子はどう？」と聞かれて

「I am tired」

「疲れた」

「I have a headache」

「頭が痛いよ」

「I wish it were Saturday」

「土曜日だといいいんだがね」

「I don't feel so good」

「あんまり良くないね」

などと答えていると本当に具合が

悪くなってしまう。

この時

「Just wonderful, thanks, and you ?」

「最高だよ、君はどう？」

「Great」

「すごく良いよ」とか

「Fine」

「問題ないよ」

と答えると、自分も相手も気分が

良くなる。元ジョージア州立大学の

シュワルツ博士は著書の中でこう

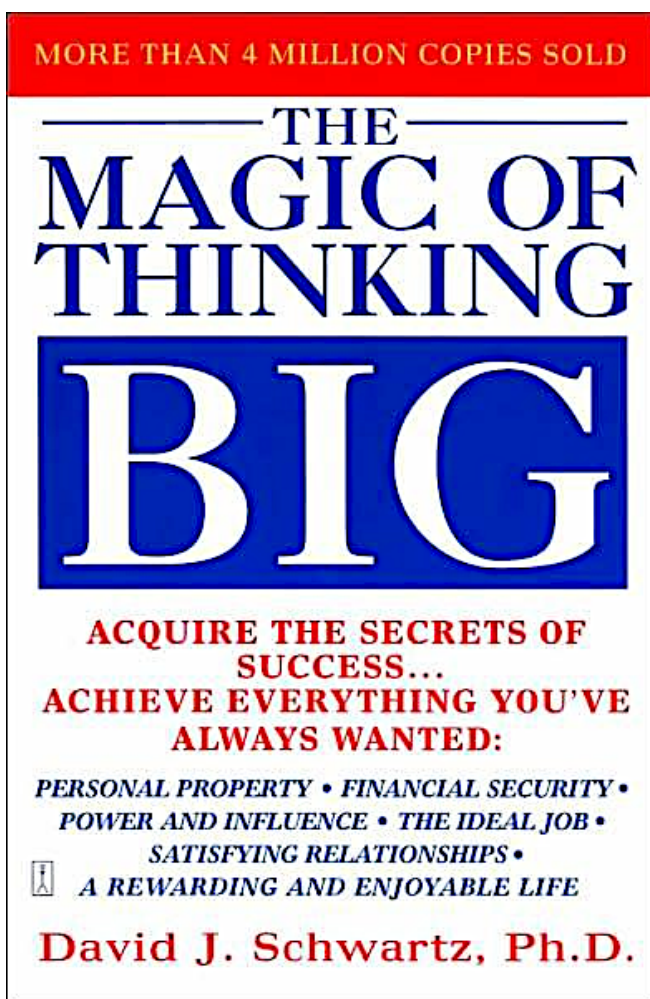
説いている。

初版一九五九年で今も売れ続け、

世界中で翻訳本を含め約四百万部も

売れている「The Magic of Thinking,

BIG」というタイトルの本の中でこ



う説いている。この翻訳本が日本では「心の力の魔術」（実務教育出版）として販売されている。

シュワルツ博士の本は示唆に富んでいる。以下、そのポイントである。



アメリカのある調査によれば、他人よりも多くの実績を上げる人の成功の秘訣は、場所でも、教育レベルでも、体の頑強さでもなく、大きな違いは、考えることが他人よりも五倍大きいことだという。

成功は幸せのサイズ、満足度のサイズ、考えるサイズによって大きく左右される。大抵の大人は、小さく考え、大きく考えないことが問題である。

しかし、誰もが成功できるものではない。成功への道は狭く混雑し、待たされるのが普通である。偉大な人はいつも世界を考え、いつも気持ちは希望に満ち、地獄の中においても天国を作ることができる。

人の運命はその意志でまきまき。夢を忘れないこと、家庭作りを諦めないこと、子供のことを忘れないこと、より良い成果の追求を忘れないこと、つまり、人が成功するかどうか、幸福になれるかどうかは、その人の

考える大きさによって決まる。人は自分で自分の運命をコントロールできるのである。

ポイントは大きく考えること、それがマジックを生む。ここには理論はない。成功を願うならば、希望を満たすために努力する。そうすれば、いつかは手元に届く。

では、どうしたら大きく考えられるだろうか？

著者は、言葉や文章で考えるのではなく、まずは絵や心象（Mind picture）で考えるべきだという。その方が創造的な発想が生まれるという。そして、例えば、大きな問題に直面したというより大きなチャレンジに直面したというように考

える。すると、面白く何かワクワク
してくる。

大きな出費を余儀なくされるとい
うより大きな投資をしなければな
らないというように考える。すると、
より大きなリターンを描けるとい
う。大きく考えることは、自分にも
他人にも創造的で前向きで楽観的
に考えて行動する勇気をくれる。

○駄目だ、出し抜かれてしまった。

まだ出し抜かれてはいない。これ
は新局面だ。もう一度やろう。

○ビジネスは失敗だ。もう終わりだ。

失敗したが、これは自分の責任だ。
もう一度やり直そう。

○七十五%も抑えられてしまった。

まだ二十五%は確保できている。
まだ十分やれる。

また、大きく考えると同時に、小
さなことにクヨクヨしないことであ
る。争いごとの九十九%は些細なこ
と、理不尽なことである。帰宅して
家での食事中、仕事で疲れたからと

言って、食事にあたって不平不満を
言うようなものである。

不平不満を言う前に、それが妥当
なことなのかどうか、重要なことな
のかどうかを自問自答する。そうす
れば、大半の場合は争いが避けられ
るだろう。

小さいことは後ろに回し、日常茶
飯事をつまらない罫に落ち込まず、
大きく考えるように努めることであ
る。

百年前頃、自動車は馬車に代わる
手頃な乗り物になると誰が考えただ
ろうか？

百年前というと、日露戦争(明治三
十七〜三十八年：一九〇四〜一九〇五
年)の頃で、当時の主力交通機関はま

だ馬車であった。速く移動したい、空を飛びたいなどと思わない限り、自動車も飛行機も誕生・発展しなかっただろう。



「二十世紀の予言」

ちなみに報知新聞は電気通信、運輸、軍事、医療など二十三項目について、二十世紀にどうなるかという「二十世紀の予言」を一九〇一年（明治三十四年）一月二日の同紙に

その内容は報知新聞社ホームページに掲載されている。

<http://hochiyominri.co.jp/contents/info/yogenhisron1.htm>

今から百年以上も前、来月一月二日には百十年前にもなる昔の予言である。その概要は以下の通り。

○無線電信電話

マルコニー発明の無線電信が進歩し、無線電話でロンドンの友人と東京で自由に話せる。

○遠距離写真

欧州の戦雲を東京の新聞記者がカメラ写真で直ちに見られる。

○野獣滅亡

アフリカの野獣は滅亡し、都会の博物館でしか見られなくなる。

○サハラ砂漠

サハラ砂漠は肥沃平野し、そこで中国・日本の文明は発達する。

○七日間世界一周

八十日間を要したことが二十世紀末には七日間で足り、男女を問わず一回以上世界漫遊する。

○空中軍艦空中砲台

ツッペリン式飛行船が発達し、空中に砲台・軍艦が漂う。

○蚊・蚤の滅亡

衛生事業の進歩で蚊・蚤の類は順次滅亡する。

○暑さ寒さ知らず

機器で調整した空気送風が実現し、これでアフリカの発展も進む。

○植物と電気

電気で野菜栽培を促進、空豆はミカン大となり、緑や黒色の花のキク・牡丹・バラが誕生し、熱帯の植物がグリーンランドで育つ。

○人声十里に達す

伝声器の改良で十里を隔てた男女が話せるようになる。

○写真電話

対話者の肖像が電話口に映る。

○買物便法

写真電話で遠距離の物品を鑑定しながら売買契約、品物は地中鉄管を経由し瞬時に入手する。

○電気の世界

燃料は薪や炭や石炭に代わり電気となる。

○鉄道速力

機関車が発達。客室は冷暖房完備。速度は時速百五十マイル（三百キロ）以上となり、東京神戸間は二時間、ニューヨーク・サンフランシスコ間は一昼夜で走向する。石炭は使用しない。

○市街鉄道

馬車鉄道などは老人の昔語り。電気車・圧搾空気車が大幅に進歩。車

輪はゴム製。街路上ではなくて空

中・地中を走向する。

○鉄道連絡

鉄道が地中を貫通して五大陸間を自由に通行する。

○暴風防止

一ヶ月前に予測するし、大砲で台風を崩壊。地震には耐震建築で対応できる。

○人体

運動と外科手術で人の身長は百八十センチ以上となる。

○医術進歩

薬服用の代わりに電気針による無痛薬液注射。顕微鏡とX線装置による病源摘発と治療。内科領域の八割は外科領域に変わる。

○自動車世界

馬・馬車は自転車・自動車に代わられ、馬は少数の好奇者が飼育するだけになる。

○人と動物の会話

小学校に動物語科。犬・猫・猿と自由に会話できるようになり、下男下女の地位は犬に代わられる。

○幼稚園廃止

無教育の人がいなくなり幼稚園が不要。男女とも大学卒業する。

○電気輸送

日本は琵琶湖の水、米国はナイアガラ瀑布の水で発電し、その電気を全国に送電する

会社案内 | 編集編領 | 組織 | 各局紹介 | 小史

スポーツ報知へようこそ

■二十世紀の豫言（報知新聞社明治34年正月版掲載）

十九世紀は既に去り人も世も共に二十世紀の新舞臺に現はるゝことゝなりぬ、十九世紀に於ける世界の進歩は頗る驚くべきものあり、形而下に於ては『蒸汽力時代』『電氣力時代』の稱ありまた形而上に於ては『人道時代』『婦人時代』の名あることなるが更に歩を進めて二十世紀の社會は如何なる現象をか呈出するべき、既に此三四十一年間には佛國の小説家ジュール・ベルヌの輩が二十世紀の豫言めきたる小説をものして讀者の喝采を博したることなるが若し十九世紀間進歩の勢力にして年と共に愈よ増加せんか、今日なほ不思議の感嘆中に在るもの漸漸思議の領内に入り來ることなるべし、今や其大時期の冒頭に立ちて遙かに未來を豫望するも亦た快ならずとせず、世界列強形成の變動は先づさし措きて暫く物質上の進歩に就きて想像するに

無線電信及電話	マルコニー氏發明の無線電信は一層進歩して只だに電信のみならず無線電話は世界諸國に聯絡して東京に在るものが倫敦紐育にある友人と自由に對話することを得べし
遠距離の寫眞	數十年の後歐洲の天に戰雲暗濛たることあらん時東京の新聞記者は編輯局にみながら電氣力によりて其狀況を早取寫眞となすことを得べく而して其寫眞は天然色を現象すべし
野獸の滅亡	亞弗利加の原野に到るも獅子虎豹魚等の野獸を見ること能はず彼等は僅に大都會の博物館に餘命を繼ぐべし
サハラ砂漠	サハラの大砂漠は漸次沃野に化し東半球の文明は漸々支那日本及び亞弗利加に於て發達すべし
七日間世界一周	十九世紀の末年に於て少くとも八十日間を要したりし世界一周は二十世紀末には七日を要すれば足ることなるべくまた世界文明國の人民は男女を問はず必ず一回以上世界漫遊をなすに至らむ
空中軍艦空中砲臺	チェペリン式の空中船は大に發達して空中に軍艦漂ひ空中に修羅場を現出すべく從つて空中に砲臺浮ぶの奇觀を呈するに至らん
蚊及蚤の滅亡	衛生事業進歩する結果、蚊及び蚤の類は漸次滅亡すべし
暑寒知らず	新器械發明せられ暑寒を調和する爲に適宜の空氣を送り出すことを得べし亞弗利加の進歩も此爲なるべし
植物と電氣	電氣力を以て野菜を成長することを得べく而して豌豆（注＝そらまめ）は橙大となり菊牡丹薔薇は緑黒等の花を開くもあるべく北寒帯のグリーンランドに熱帯の植物生長するに至らん
人聲十里に達す	傳聲器の改良ありて十里の遙きを隔てたる男女互に婉婉たる情話をなすことを得べし
寫眞電話	電話口には對話者の肖像現出するの裝置あるべし
買物使法	寫眞電話によりて遠距離にある品物を鑑定し且つ賣買の契約を整へ其品物は地中磁管の裝置によりて瞬時に落手することを得ん
電氣の世界	薪炭石炭共に燻き電氣之に代りて燃料となるべし
鐵道の速力	十九世紀末に發明せられし葉巻煙草形の機關車は大成せられ列車は小家屋大にてあらゆる便利を備へ乗客をして旅中にある感無からしむべく畜（注＝ただ）に冬期室内を暖むるのみならず暑中には之に冷氣を備すの裝置あるべく而して速力は通常一分時に二哩急行ならば一時間百五十哩以上を進行し東京神戸間は二時間半を要した今日四日半を要する船着港間は一晝夜にて通ずべしまた動力は勿論石炭を使用せざるを以て煤煙の汚水無くまた給水の爲に停車すること無かるべし
市街鐵道	馬車鐵道及び鋼索鐵道の存在せしことは老人の首話にのみ残り電氣車及び堅牢空氣車も大改良を加へられて車輪はゴム製となり且つ文明國の大都會にては街路上を去りて空中及び地中を走る
鐵道の聯絡	航海の便利ならざる無きと共に鐵道は五大洲を貫通して自由に通行するを得べし
暴風を防ぐ	氣象上の觀測術進歩して天災來らんとすることは一ヶ月以前に豫測するを得べく天災中の最も恐るべき暴風起らんとすれば大砲を空中に放ちて變じて雨となすを得べしされば二十世紀の後半期に至りては難船海嘯等の變無かるべしまた地震の動搖は免れざるも家屋道路の建築は能く其害を免るゝに適當なるべし
人の身幹	運動術及び外科手術の効によりて人の身体は六尺以上に達す
醫術の進歩	藥劑の飲用は止み電氣針を以て苦痛無く局部に藥液を注射しまた顯微鏡とエックス光線の發達によりて病原を摘發して之に應急の治療を施すこと自由なるべしまた内科術の領分は十中八九まで外科術に移りて後には痔結核の如きも痔瘻を剝出して腐敗を防ぎパチルス殺すことを得べし而して切開術は電氣によるを以て毫も苦痛を與ふること無し
自動車の世	馬車は廢せられ之に代ふるに自動車は廉價に購うことを得べくまた軍用にも自轉車及び自動車を以て馬に代ふることとなるべし從つて馬なるものは僅かに好奇者によりて飼養せらるゝに至るべし
人と獸との會話自在	獸語の研究進歩して小學校に獸語科あり人と犬猫猿とは自由に對話することを得るに至り從つて下女下男の地位は多く犬によりて占められ犬が人の使に少く世となるべし
幼稚園の廢止	人智は遺傳によりて大に發達し且つ家庭に無教育の無人きを以て幼稚園の用無く男女共に大學を卒業せざれば一人前と見做されざるにいたらむ
電氣の輸送	當本（注＝ほん）は琵琶湖の水を用ひ米國はナイアガラの瀑布によりて水力電氣を起して各々其全國内に輸送することとなる

以上の如くに算へ来らば到底俄に盡し難きを以て先づ我豫言も之に止め餘は讀者の想像に任す死に角二十世紀は奇異の時代なるべし

【注】「報知新聞」明治34年（1901年）1月2日、3日付